

冬の到来を告げる「雪」は、室町時代後期頃より、染織、漆工、金工、陶磁器といった生活を彩る工芸にデザインされるようになった日本独特の模様の一つです。空から舞い降りる雪をデザイン化した「はつれ雪」は戦国時代から安土桃山時代にかけて見られるようになり、江戸時代には「雪輪模様」としてさまざまな展開されるようになりました。同じく戦国時代から安土桃山時代に表わされるようになった「雪持柳」「雪持笹」といった模様は、雪が降った朝、植物に降り積もった雪に情趣を感じた日本人のこころが映し出されています。古くから日本絵画に描かれてきた雪景色もまた、模様として工芸品に表わされるようになりました。江戸時代末期になると西洋の自然科学の知識が日本にもたらされ、顕微鏡で観察された雪の結晶が知られるようになり、「雪の花」として衣装の染模様や工芸のデザインに取り入れられました。

室町時代から江戸時代にかけての工芸品に表現されるさまざまな雪の模様を通して、自然とともに暮らし、四季折々の自然の形を模様にしてきた日本独特の美意識を再発見してみてはいかがでしょうか。

日本の伝統模様

雪

Traditional Motifs in Japanese Art: Snow

Snow signals the arrival of winter. Having been featured on Japanese textiles, lacquerware, metalwork, and ceramics since the late 1300s, snow has graced everyday Japanese life, making it a motif unique to Japan. Simplified motifs of snow falling from the sky can be found from the 1500s, which later developed into a snowflake design during the Edo period (1603–1868). Also in the 1500s, motifs of snowy willow and snowy bamboo leaves became popular, reflecting a Japanese sensibility that finds beauty in the snow that had accumulated on plants on a winter morning. Snowscapes, another common theme for Japanese paintings, were also used as craft designs. Towards the end of the Edo period, Japan began to be exposed to Western natural science; the shape of snow crystals as viewed under a microscope was incorporated into designs for textiles and other crafts. Decorating daily life with motifs of the four seasons to appreciate nature is unique to the aesthetic culture of Japan. Please enjoy the snowy motifs found in Japanese decorative arts from the 1500s to the 1800s.

降る雪

きよめゆき 細雪、こなゆき 粉雪、ぼたんゆき 牡丹雪、ふぶき 吹雪、きりゆき 霧雪、たまゆき 玉雪、はいゆき 綿雪など、雪には、その降り方や形状によつて、さまざまな名前があります。安土桃山時代の人は、空から舞い降りる雪の粒を模様にして「はつれ雪」と名付けました(No.3、4)。花びらが開いたような雪の模様は江戸時代になると大きな輪の形に変化して「雪輪」と呼ばれるようになります(No.5)。雪輪模様には円の縁に一定の間隔で小さくばみがあります。



からおり べにあさぎ だんまがきくゆき わつゆしば もよう
5 唐織 紅浅葱段籬菊雪輪露芝模様

唐織(絹) 江戸時代・18世紀 文化庁

Noh Costume (*Karaori*) with Chrysanthemums on Hedges with Snowflakes and Dew on Grass
Twill-weave silk brocade with supplementary gold-weft patterning (*karaori*)
Edo period, 18th century
Lent by Agency for Cultural Affairs

雪輪のなかに梅樹と水仙を織り出しています。冬の寒い時期に芳香とともに開花する花々を入れることで、新春の喜びが感じられます。



かぶらひようもんくら
3 蕪平文鞍

木製漆塗 室町時代・16世紀
沼田鎌次氏寄贈 H-4290

Saddle with Turnips
Lacquered wood with gilt bronze
Muromachi period, 16th century

厚い金銅板を切り抜いて蕪のまわりに雪を散らした文様を表わしています。蕪は音が頭に通じ、武家の間で縁起物とされました。



どうぶく そめわけじ いちようゆき わちらし もよう
4 ◎ 胴服 染分地銀杏雪輪散模様

平絹、絞り、銀泥 安土桃山時代・16～17世紀
石見銀山見立役、吉岡隼人が徳川家康より拝領 I-4070

Samurai's Coat (*Dōbuku*) with Stripes and Snowflakes on Ginkgo Leaves
Plain-weave silk with tie-dyeing and silver pigment
Azuchi-Momoyama period, 16th-17th century
Given to Yoshioka Hayato by Tokugawa Ieyasu

黄色い銀杏の葉と、雪の粒を模様にした「はつれ雪」を組み合わせた模様です。落ち葉とともに舞い降りる雪は晩秋の景色でしょうか。





白上げで染め残した部分を効果的に雪に見せた風景模様の打掛です。雪景色の打掛には中綿が入っていて纏えば暖かかったことでしょう。

6 打掛 紫縮緬地雪景模様

縮緬（絹）、刺繍、白上げ
江戸時代・19世紀 I-4090

Formal Outer Kimono (Uchikake) with Snowscape
Plain-weave silk crepe (*chirimen*) with embroidery and paste-resist dyeing (*shiroage*)
Edo period, 19th century

清少納言の『枕草子』の一節「雪のいと高う降りたるを」には、雪が高く降り積もった景色を、御簾を高くかかげて眺める場面が描かれています。美しい雪景色は古くから、眺めて楽しむものでした。江戸時代になると、雪景色は衣服や調度、器などに表わされるようになりました（No.6）。植物には、まるで綿帽子を被ったように白い雪がこんもりと積もります。積もる雪の形が雪持笹（表紙No.2、No.7）や雪持柳（表紙No.1）といった模様になりました。

積もる雪



7 掛袱紗 紺綸子地雪輪雪持笹模様

綸子（絹）、描絵、絞り
江戸時代・17世紀 橋本貫志氏寄贈 I-4085

Gift Cover (Fukusa) with Snowy Bamboo Leaves within Snowflake
Silk satin damask (*rinzu*) with tie-dyeing and painting
Edo period, 17th century



雪輪模様のなかには、帽子を被ったような雪が積もっています。雪持笹は寒い雪のなかでも常緑の美しさを見せる笹の若さを愛でる模様です。



見込み

8 銕絵雪笹文手鉢

虫明、陶製、銕絵
江戸～明治時代・19世紀
G-1210

Bowl with a Handle and Snowy Bamboo Leaves
Mushiage ware
Stoneware with underglaze brown
Edo period-Meiji era, 19th century

銕絵の上に白い釉薬を飛び散らせ、雪を被る笹を表わしています。一方、見込みには笹に降る雪の景色が見られます。



犬と雪

児童唱歌『雪』には「犬は喜び庭かけまわり」という一節があります。雪のなかでも元気に走る犬の姿は昔も今も慣れ親しんだ風景です。もともと犬は野外での暮らしに慣れているため、寒い地方に住む犬は寒さに強く、冬になると、肉球の間の毛が長く伸び、足の裏全体を覆い、防寒の役割をもちました。雪の降るなか、犬の元気で朗らかな様子は、昔の人の目にも愛らしく映ったのでしょう。

この産衣には、雪が降り積もった笹の原で子犬が遊んでいる様子が、刺繍とアップリケで表わされています。犬は子犬さんであることから、生まれたばかりの子どもが着用する産衣に用いることで、元気に成長しますように、という思いも込められているようです。



9 産衣 紫縮緬地子犬雪輪笹模様

縮緬（絹）、刺繍 江戸時代・19世紀 野口彦兵衛旧蔵 I-3911

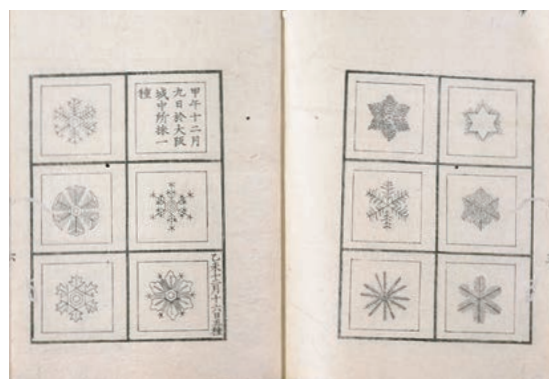
Kimono for Newborn (*Ubugi*) with Puppies, Snowflakes, and Bamboo Leaves
Plain-weave silk crepe (*chirimen*) with embroidery
Edo period, 19th century; Formerly owned by Noguchi Hikobei



『雪華図説』と

雪華模様の流行

江戸時代後期、下総国古河藩主、土井利位（一七八九～一八四八）は江戸幕府の老中首座として活躍する名君でしたが、西洋で発明された顕微鏡を用いて雪を観察した、初の日本人としても知られています。土井は二十一年かけて雪の結晶を調査し、古河藩の家老だった蘭学者、鷹見泉石（一七八五～一八五八）の協力のもと、七四種の雪の結晶をスケッチした成果を版本『雪華図説』（天保三年（一八三二）刊）として刊行しました。雪輪や雪持などのイメージしかなかった日本人にとって、実際の雪の結晶の形はまさに雪の花。この刊行をきっかけに、花のような雪の模様が広く一般に知られるようになり、さまざまな工芸品の模様に取り入れられるようになりました。



雪華図説 正

10 雪華図説 正統

土井利位著 紙本墨刷、袋綴
正：江戸時代・天保3年（1832）
続：江戸時代・天保10年（1839）
徳川宗敬氏寄贈 QB-9811

Volumes 1 and 2 from
Illustrated Snow Crystals
By Doi Toshitsura
Volume 1: Edo period, 1832
Volume 2: Edo period, 1839

参考図版：溪斎英泉筆
江戸の松名木尽 押上妙見の松
古河歴史博物館



表紙左上：1 唐織 萌黄地雪持柳桐菊藤梅片身替模様 唐織（絹） 安土桃山時代・16世紀 奈良・金春家伝来 I-3209

Noh Costume (*Karaori*) with Snowy Willows, Paulownias, Chrysanthemums, Wisterias, and Plum Trees
Twill-weave silk brocade with supplementary gold-west patterning (*karaori*); Azuchi-Momoyama period, 16th century; Passed down by the Konparu Troupe

表紙右下：2 小袖 紅綸子地雪持笹桜模様 綸子（絹）、絞り 江戸時代・17世紀 I-720

kimono (*Kasode*) with Snowflakes, Bamboo Grass and Cherry Blossoms Silk damask (*rinzu*) with tie-dyeing; Edo period, 17th century

※作品データは、図版番号、指定（◎は重要文化財）、作品名称、作者等、材質技法、時代・世紀、寄贈者等、当館の所蔵番号の順に記しています。